

メッセージ題 「心強められて」

聖書：使徒言行録第2章1～13節

牧師：秋山 義也



・五旬祭、ペンテコステ

ユダヤ教のお祭りの1つに、「五旬祭」があります。「収穫祭」とも呼ばれています。過越祭から50日目。小麦の収穫を祝う祭りです。レビ記23章15～21節にその起こりの言葉がありますから、今日まで何千年と続いている祭りです。人々は、収穫できたという感謝を神に献げました。その行いは、穀物を育くみ、いのちの糧である収穫物が神からきていることの証しでした。そして、収穫を献げるということは、自分自身を献げる、ということでもありました。自分のいのちが神さまからきて、神さまによって生まれている収穫としての感謝を表すのです。

今日、私たちは母の日を過ごしています。この日も正に、自分を生み、また育ててくれた母への感謝を表す時です。そして、その感謝は、母親を自分にくださった神様への感謝でもあります。昨年度、キリスト教の幼稚園に入園した長男が、こんな歌を歌ってくれました。「お母さん、大好き～、お母さん、大好き～、神さま、ありがとう、お母さんをくださって」。沢山の人が病にかかっています。亡くなった人も、世界中に沢山います。中には、お母さんを見送った。お父さんを見送った。そういう方がいます。夫を、妻を。子どもを失った人がいるでしょう。そのような隣人の悲しみや気持ちを思うとき、それぞれのいのちとの出会いが神さまからきていることを思わされています。母の日の起こりー子どもメッセージで話した、1908年5月10日、アンナさんがお母さんの追悼式を教会でおこなった際、参列者皆に母親の好きだったカーネーションを配ったあの出来事を受ける中で、生きていた時も、この世でお別れした後も、愛する人のことを覚え合える、いのちの出会いを大切にし合える幸いがあることを思います。痛みの中にある方々に慰めを、また今共いのちの別れを経験している隣人と共に、その出会いを思い起こし合いたいと願います。

・共同体全体で受ける言葉

弟子たちが一同に集まっていたのは、エルサレムでした。人々が祭りのために集まってくる都市です。その祭りの只中で、彼らに聖霊が臨んだ、というのです。これがペンテコステ、聖霊降臨祭とキリスト教が呼ぶようになった祭であり、「教会の誕生日」と言われる日です。

聖霊は目には見えません。しかし、この霊の働きを、イキイキと使徒言行録は語っています。使徒が働いたという書簡名ですが、度々出てくる聖霊の働き抜きにして、使徒言行録を語ることはできません。

「聖霊行伝」と呼ぶ人もいます。人々が宣べ伝えているその働き、一切が、聖霊によって導かれ、また支えられているものであったのです。その始まりが、ペンテコステだということです。



一同が集まっている時、彼らのところに激しい風が吹いてくるような、大きな音がしました。聖霊を表す言葉に「風は思いのままに吹く」(ヨハネ3:8)があります。彼らは主イエスの復活の後、人々の前に姿を現すことなく、集まって祈り、食事をしていました。しかし聖霊は彼らの姿を大きな風の音をもって、また、それぞれに炎の舌のようなものが分かれ、様々な国の言葉を話し出す奇跡をもって、人々の注目を浴びました。主イエスの十字架に出来事から、弟子たちは、人目を隠れて過ごしていました。人の目にさらされることは危険でした。主イエスの弟子たちだとばれたら、密告されたら、ひどい目にあう、そういう恐れがありました。しかし、聖霊が彼らに降ると、彼らは語り始めたのです。「霊」が語らせるままに(4節)。思いのままに吹く風のように。そこには恐れではなく、イキイキとした自由の思いがあったでしょう。誰から何かを言われるのではないか、ということをおそれるのではなく、私は、私の受けた言葉で、主イエスを大胆に語る。救い主を胸をはって証しする。そのような出来事が、だれか一人ではなく、共同体全体に及んだのです。これが教会の大事なところ。誰か一人が、神さまの言葉を語れるのではなく、一人ひとりが、自由に、イキイキと語る者とされる。2000年もの時を経て、教会は語り続けてきたのです。いい時も、悪い時も。「皆が共に学び、皆が共に励まされるように、一人一人が皆、預言できるようになりなさい。」(Iコリント14:31)瑞穂教会が無牧師の時、私が赴任する前の約1年半の間、この場所で、礼拝が続けられていたこと、また信徒・牧師問わずに御言葉の務めがあり、聴く人々があつたことを、私は今振り返ります。一人ひとりが語る者とされる。初代教会のように、私たちもそのような者であつたし、またこれからもあるのです。何という励まし、心強められる出来事でしょうか。誰か一人がいなくては、教会ではない。礼拝ができない。ではなく、聖霊を皆で受けることができる。大人も子供も、健康な人も、そうでない人も、皆で受けることができる。大きな恵みがここにあるのです。

・災害のような祭り

ペンテコステ。この聖霊の出来事は、一見、災害のように見えます。大きな風。これは暴風のようなものです。天から音が響いたのです。そして、炎のような舌もまた、火事が起きたのではないかと人々の目から見ると、災害のような出来事です。しかし、旧約の時代から、神さまはしばしば、人にこのようなかたちで現れ、メッセージをくださいました。モーセを働き人に招いた時、燃える柴の幻を通して伝えました。雹をもって、神に敵対する者たちをうったということもあります。水や風による出来事も、神様からの出来事として聖書には記されてあります。

今日を生きる私たちもこれまで、様々な災害に遭ってきました。日本の歴史、世界の歴史を通して、風や炎の前でいかに人間が無力なものか。地震や台風、津波の中で、助けてと叫ばずにはいられない者かを学んできました。この度のウイルスもその一つでしょう。人間の知恵や力ではどうにもならないことの方が、実は沢山あることを聖書から学ぶのです。

しかし、そのような人の力が無力に思える風や炎を通して、主なる神様は人々を新しい生き方へと招くのです。聖霊が臨み、これまで人前に出ることのなかった弟子たちが、人前に出て、イエスは救い主であることをイキイキと語り始めたのです。

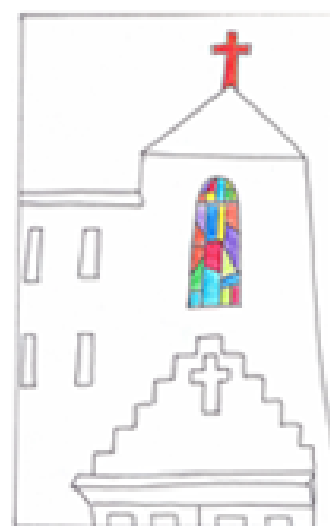
コロナのことを通して、今、私たちは聖霊の風を受けながら、教会として一体何を語れるのか、どう祈ることができるのか、向き合い続けたいと思います。イキイキとした、あの教会の始まりの日、ペンテコステの出来事を省みながら、私たちも炎、燃えるような思いを、もう一度いただき、福音を宣べ伝えることに、前進したいのです。

・どんな出身の人も

祭りには、様々な国の人が集まっていました。その人々は、主イエスの弟子たちが、それぞれの国の言葉で、話し合いながら、理解しあっているのを聴きました。それを聴いて、あっけにとられたのです。ガリラヤの出身の弟子たちが多くいたこともあり、なぜガリラヤの人たちが、いろいろな言語を扱っているのか、と思う人もありました。ガリラヤ出身の人は田舎者であり、なまりがあり、沢山の言葉をしゃべれるような知的階級の人々ではないと思われていたのです。事実、主イエスの弟子たちには、様々な職種の人がありました。徴税人がおり、漁師がいました。皆、それぞれの仕事、それに見合う生活をしていました。この教会で以前行われた、中部連合少年少女春の修養会で講師だった田口昭典先生は、主イエスの弟子たちについて話してくださいました。弟子たちは皆違うどころか、敵対し合うグループに身を置いていた者もいた。とても仲良しになれるような関係ではなかった。そういう弟子たち一人ひとりを、主イエスは必要とされたんだ、と語ってくださったことを思い起こします。でも彼らに共通するのは、主イエスからの招きを受けたこと。必要とされたこと。そして主義主張の違いを越えて、主イエスの赦しの中、復活後にまた再会し、主イエスの体と血を、いのちを受けたことにあるのです。そのいのちの分かち合い出来事、主の晩餐の出来事は、聖霊が臨んだ後、世界中に広がっていきます。そこには、身分や学歴ではなく、主イエスが「わたしと一緒に生きよう」と言ってくれたという招きを受け入れたかどうか、が大事なのです。共にいのちの糧をいただく幸いに与っているかが問われるのです。

・故郷の言葉、母国語

その世界中に広がっていくという出来事が、この世界の言葉をもって語りだすという出来事と共に、世界中の人々と出会う体験ということなのです。パルティア、メディア、エラム、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネ。これ程に様々な地域から集まってきた人々がそこにいたからこそ、そこで語られている言葉の違いがよく分かったのです。生まれながらのユダヤ人、ユダヤ教徒もいれば、そうじゃない人たちもいた。クレタやアラビヤ出身の者もいたのです。教会、それは、出身がどこかは関係がありません。世界中の人々が集っていい、そういう場所です。その人々との出会いを喜べる場所なのです。自分の故郷の言葉を聞いた。(6節)そこに集まっていた人々は、外国で故郷の言葉を聞いたとき、自分に向けられた言葉として聴いたでしょう。故郷の言葉を「母国語」とも言います。母なる国の言葉。母から語られるような安心に包まれた言葉です。あなたが大切だ。あなたを愛している。故郷の言葉とは、そういう思いで聞ける言葉なのです。



瑞穂教会にも一昨年度、ジェイクさんとの出会いがあり、また中国からの来会者、フィリピン出身の方との出会いがあります。SさんとKさんの結婚を通してインドネシアが身近になり、昨日Mさんは、Wさんとの結婚生活に臨むために、シンガポールに飛びたちました。

世界の人たち、様々な出身の方々との出会いを通して、私たちは同じ、聖書の言葉、神の言葉による、安心をいただいていることを思います。そして、あの教会のように海外から来られた方々、ルールのある方たちが、この教会で、「母国語」を聴くような安心があることを願っています。

世界中が、今コロナウイルスによって痛みを覚え、皆が不安を覚えている中で、その共通の体験をどう語るのか。あの国が悪い。あの地域、あの出身の人の責任だ！お断りだ！と語るのか。その言葉を、もし私が言われたらどう思うだろうか。これまで語ってきた、大切にしてきた出会いの交わりを思い返し、他者を思い、冷静に言葉を選びたいのです。そして世界中皆が痛んでいるという出来事の中で、皆が苦しい時だからこそむしろ、愛の共同体である私たちは、神から与えられた出会いの中で、互いのいのちが支え合い、祈り合い、励まし合えるものであることを、絶えず、表したいのです。主イエスがいのちを分かってくださった、主の晩餐の出来事を、私たちは言葉と行いで表したい続けたい。あなたが大切だ。あなたを愛している、との思いに活かされていきたいのです。主イエスがそう生きて下さった。だから私たちも倣い、従っていこう！それが、キリストの教会です。そして今、世界中の教会で、様々なかたちで礼拝が献げられていることを覚えたいのです。ルワンダで、シンガポールで、インドネシアで、カンボジアで。アメリカや韓国、中国、フィリピンにおいて、イキイキとした聖霊の風により賛美と祈りが献げられていることを覚えたいのです。励まされるのです。一人ではない。私たちはいつも、どんなときも一人ではないのです。神さまに助けてと大いに言い、隣人のことを思い、交わりと奉仕に、今できることをやれる限り行っていきたいのです。

・酔っ払っている

様々な国の言葉を話しながら、語ることをやめない。それは互いの言葉を理解していたからでしょう。この様子を見た人々から、彼らは酔っているのだ、と嘲りを受けました。教会は一体何をやっているんだ。教会の誕生日から、私たちはそう思われていたのです。この後、使徒ペトロが「酔っているわけではないのですよ」と釈明をしますが、酔っているという表現から読みとれることの中に、世界の人々との出会いを喜び、神の言葉を聞くことを楽しんでいました。外から見ると滑稽なんです。内にいると、楽しんでいるそうした人々の集まりの様子が見えてくるのです。だから、教会の外の人はお断り、というのではなく、世界中の人々との出会い、主イエスがくださった出会いを喜び続けて行く。お互いのいのちを大切に仕合っていく。ここに、私たちが生きるならば、そのところに生きてみようという人が起こされていくでしょう。

世界中の言葉が、速やかに翻訳される時代です。このコロナのことでも、世界のリーダーの言葉や、世界の取り組み、教会の礼拝の様子が、こんなにも早く知ることができることは、本当に感謝なことです。しかし、その故郷のことを思い、その国のこと、その人のことを知るには時間が沢山かかります。出会うこと、その人を知っていくというのは、ゆっくりでいいのです。酔っぱらいというのは、その時間を楽しむ生き方でもあるでしょう。神さまが今、私たちに何を語っておられるのか。聖書からじっくりと聴きたい。祈りの中で、神さまとじっくりと、しかし頼んで語り合いたい。そして、隣人の声、世界の友の声に耳を傾けて、この一週も新しく歩みだしたいのです。

